

サッカー育成年代における国際比較

Research into the system of training the football players
classified into youth category in Japan comparing with other countries

1K06B147

指導教員 主査 太田章先生

寺島 達也

副査 広瀬統一先生

【序章 諸言】

この研究の目的は、日本サッカー強化のために必要な育成システムを見つけることである。日本の育成システムの現状と隣国の韓国、FIFAランキング1位スペインと2位のブラジルのそれと比較することで、日本から良い選手を育てることに必要なことは何かを検討していく。

【第1章 日本】

日本の育成年代のサッカーする環境は、部活動がメインとなっている。中学・高校では、指導者が教育者であるため、技術面以外での成長も期待される。

また、クラブチームは、ほとんどクラブチームは芝生で練習ができるなど環境は良い。指導者は専門的な知識を持った人でプロに近い指導を受けることができる。もともと才能がある選手が、専門的な指導を受けることができるため、各カテゴリーの代表にはクラブチームから選ばれる選手が多くなっている。

大学では、人工芝で練習でき、指導も元プロの選手が行うなど、サッカー環境は整えられている。大学からプロに進む選手も非常に多く、選手育成の重要な1つとなっている。

【第2章 韓国】

韓国は近年、クラブチームも増えてきているが、基本的には、部活動である。部活動では4強制度があり、全国大会でベスト4に入った選手しか次のステップでしかプレーできないシス

テムがある。これは、勝負強くなるという、メリットがあり、少数精鋭のエリート教育のため、高校から伸びてくる選手は相手にされないというデメリットもある。近年韓国サッカーは部活動のベスト4主義を緩和し、クラブチーム数も年々増やすなど、様々なことに取り組み、変革を行っている。

【第3章 スペイン】

スペインは部活がないため、プロクラブの下部組織や町クラブが基本となっている。クラブでは、細かくチーム分けされ、年齢が上がるにつれて発展の指導を行い、テクニクに加えて、フィジカル面やゲームコントロール感を鍛えていき、16歳から毎週試合を行い、実戦で使える戦術を修練していく。また、クラブから遠い子どもには、寄宿学校が用意されている。

【第4章 ブラジル】

ブラジルでは、多くの種類のサッカーが存在し、6歳からサッカークラブやサッカースクールに入って、サッカーすることができる。そこでは、12歳から年齢やレベル別にチームが分かれ、週末にチーム別の公式戦があり、実戦を多く経験できる。また、遠隔地から来ている子どもたちは、クラブの寄宿舎に住み込み、サッカーに集中できる環境が整えられている。

【結章 考察】

日本、韓国、スペイン、ブラジルの各国のサ

サッカー環境、育成システムは様々である。日本の改善すべき点は、試合がトーナメント制、ユースと部活の交流が少ないこと、高学年が試合に出る傾向があることが挙げられる。これは、歴史的・社会的背景が大きく関わっているため、どこかの国の育成システムをコピーしても改善することは難しい。

日本には、部活動とクラブユースという他国にはあまり見られない、育成環境が存在する。お互いに弱点はあるものの、部活動とクラブユースの共存方法が、今後重要になる。部活動とクラブユースがうまく共存すれば、世界に類を見ないユニークな育成システムが構築でき、良い選手を育成することができ、日本代表の強化につながるはずである。